



ニューズレター



干潟に群れるシギ・チドリ類
(撮影 高野茂樹氏)



東京湾最大の海草藻場(富津)のアマモ群落



アオサが増殖しつつある谷津干潟



千葉県に委託している藻場調査の実施風景
(富津)



CONTENTS

- モニタリングサイト1000 P1
“シギ・チドリ類調査”
- 平成18年度 全国藻場調査検討会 P3
第19回巨木を語ろう、全国フォーラム開催
- 2006年JICA生物多様性情報 P4
システム研修受入
- 第9回自然系調査研究機関連絡会議 P5
生物多様性センター来館者の声
- 標本紹介(第12回)「タンチョウ」 P6
- 生物多様性センターガイド P7
富士山ライブカメラ(第4回)
- 第38回ガンカモ科鳥類の生息調査 P8
- センターの出来事
- センター案内図

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査

シギ・チドリ類とはシギ科とチドリ科鳥類の総称で、「シギチ」と略称されることもあります。その多くの種は、季節によって長い距離を移動する渡り鳥であり、春と秋に繁殖地と越冬地の間を移動する途中に日本の干潟や砂浜、水田などの湿地に飛来します。このような日本列島を渡りのルートとしているシギ・チドリ類の中には、北極圏からオーストラリアやニュージーランドまで1万キロ以上も移動するものもあります。

シギ・チドリ類が生息する湿地のタイプは様々ですが、干潟には特に多くの鳥が訪れます。干潟には川からたくさんの栄養(有機物)を含む土砂が流れ込み、また、満潮のたびにプランクトンが運ばれてくるため、シギ・チドリ類の餌となるカニやゴカイなどの底生生物が大変豊かであるからです。

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査

日本では戦後の大規模な干拓や埋め立てなどにより、干潟の約4割、淡水湿地の約6割が失われ、世界的にも湿地は人間活動の影響によって急激に縮小しており、こうした状況がシギ・チドリ類の生存にとって脅威となっています。最近では日本で記録されるシギ・チドリ類の多くについて生息数の減少傾向が見られるという研究結果(*1)が出されています。

生物多様性センターではモニタリングサイト1000(重要生態系監視地域モニタリング推進事業)の一環としてシギ・チドリ類に関する調査を行っています。

調査は、毎年、シギ・チドリ類が多く飛来する春、秋、冬の3期にわたって行い、全国118箇所の調査地にてシギ・チドリ類の個体数を記録するというものです。この記録を集計すると、シギ・チドリ類がどの場所にどれくらい生息しているのか、年や季節によってどのように生息数が変化しているのかを知ることができます。

調査地となっている118箇所のうちの約9割は干潟です。干潟のシギ・チドリ類は、餌としている底生生物の生息状況の変化を受けやすいと考えられているため、生態系の健全性を示す「指標＝ものさし」としてとらえることができます。つまり、この調査には、シギ・チドリ類を見守るとともに、様々な生き物の拠り所となっている干潟の生態系を監視するという重要な役割があるのです。



ダイゼン(汐川干潟)

一般に、継続して調査を行うことを「モニタリング」といいますが、モニタリングを行うには、同じ条件で調査をすることが大切です。シギ・チドリ類の調査では、毎回、観察する範囲、時期、時間などの条件をなるべく同じにしており、観察をする人は、シギ・チドリ類の識別方法を熟知していなければなりません。シギ・チドリ類は、観察する季節によって羽の色に変化があり、羽の模様がよく似ている種が多いことから識別がとて難しく、きちんとした調査を行うには、観察の経験を積んだ調査員が必要です。モニタリングサイト1000は、調査を長い間続けていくことを目標としており、こうした調査員の方々のご協力が欠かせません。

(*1) 天野一葉(2006)干潟を利用する渡り鳥の現状「地球環境」

このモニタリングサイト1000の交流会が、平成18年11月12日、千葉県習志野市谷津干潟自然観察センターで開催されました。これまでの熊本県八代市(17年度)、愛知県名古屋市(18年度)での開催に引き続き、今回で3回目となりました。この交流会は、調査の成果を発表して意見を交換することで、調査に関する様々な思いを共有することを目的としており、どなたでも参加できるイベントです。今回は、観測結果に基づいた科学的な解析結果の報告や干潟との関わりについての経験談など様々な発表がなされました。いずれも長い経験に裏打ちされた発表で、特に東京湾における干潟の調査は、戦後の干潟の急激な減少と向き合いながらの調査であったことを認識させられました。

交流会の前日には、専門家を交えた検討会が開かれ、調査の課題について活発な議論が交わされました。底生生物調査との連携や調査データの共有のあり方などが主なテーマとなり、今後も引き続き議論を重ねていく必要性が確認されました。

調査を充実させていく上で検討会や交流会の役割は大きいのですが、こうした連携の輪をさらに広げていくことのメリットは計り知れません。モニタリングの動きは広がりがつあり、これらが徐々に結びついていくことができれば、それぞれのモニタリングがより効果的に働くこととなります。市民・NPO・地域・行政といった様々な主体が連携を深めていくためには、まず情報の共有を進めていかなければならず、これらはモニタリングサイト1000についても同じことがいえます。

現在、生物多様性センターでは、調査に関する情報整備を進めていますが、過去17年に及ぶシギ・チドリ類の調査記録を一元化する作業もその一つです。調査記録は調査員の方々の賜物ですが、これを集計し活用しやすい状態にしておくことは生物多様性センターの責務でもあります。また、この整備後のデータが、自然環境の保全施策に有効活用されるよう検討を進めていく予定です。

(写真提供 WWF ジャパン)



シギ・チドリ類調査検討会



シギ・チドリ類調査交流会

平成18年度 全国藻場調査検討会

平成18年11月28日、当センター主催の浅海域生態系調査(藻場調査)の検討会が東京海洋大学(桟水会館)にて開かれました。本調査は、自然環境保全基礎調査の一環として、平成15～19年度の5年間、全国129箇所の藻場を対象に実施されている国内初の本格的な調査です。

藻場は、浅海域の代表的な生態系の一つで、多様な生物が生息して水産上重要種の育成場ともなっていますが、開発や「磯焼け」等により急速に姿を消してきました。「日本の藻場の現状」を把握し、今後の保全施策の基礎情報とすることが本調査の狙いです。

全国から駆けつけた海藻・海草の専門家の先生方により、各地における調査実施状況、調査報告書の取りまとめ方針、今後の作業スケジュール等について、活発な議論が行われました。

なお、今年度に現地調査を終え、平成19年度内に最終報告書が取りまとめられる予定です。



第19回巨木を語ろう 全国フォーラム開催

巨樹・巨木林の生育地である自然環境の保全と普及啓発の促進を目的として、昨年の12月3日(日)に第19回巨木を語ろう全国フォーラムが全国巨樹・巨木林の会の主催により、開催されました。今回は新宿御苑の100周年記念イベントの一環として、新宿御苑において開催されました。

生物多様性センターからは、東海林センター長以下3名が出席し、基礎調査の一環として実施している巨樹・巨木林調査の概要等について報告を行いました。

巨樹・巨木林調査データベース検索HPの更新

昨年度公開した巨樹・巨木林調査データベース検索HPについて、今まで非表示となっていた巨木の所在地や故事・伝承、信仰の有無等について(一部を除き)検索が可能になりました。また、検索結果はCSV形式でダウンロードが可能になりましたので、是非HPをご覧ください。

- 巨樹・巨木林調査データベース検索HPのURL

<http://www.kyoju.jp/data/index.html>



トピックス

調査成果物使用事例について

生物多様性センターで実施された調査の結果はどのような形で使用されているのでしょうか？生物多様性センターでは過去に様々な生物の生息分布調査を実施しています。調査結果はマスコミ、教育機関、調査・研究機関、行政機関等において様々な形で使用されています。ここでは動物分布調査について昨秋以降、マスコミにおいてとりあげられた事例を紹介します。

2006年は野生生物と人間の関わりがクローズアップされることが多い年でした。ツキノワグマの人里への相次ぐ出没が報道されるにつれ、また、イノシシによる農業被害が相次ぎ、猪年である2007年が近づくと、第6回基礎調査で実施されたツキノワグマ、イノシシの分布調査結果について多くの問い合わせがありました。

新聞報道ではツキノワグマの人里への出没原因、学習放獣や里山保全といった対策とともに分布図が紹介されています。イノシシについては、分布が広がっている理由やイノシシの生態、農業被害とその対策についての意見とともに分布図が紹介されています。

TVについてはツキノワグマ、イノシシともに番組制作の基礎資料として使用されている例がみられました。

2006年JICA生物多用途情報システム研修を受け入れました

9月29日から11月17日までの2ヶ月弱に渡って、国際協力機構(JICA)の「生物多様性情報システム研修」を実施しました。この研修は、生物多様性条約等に基づいて各国の生物多様性に関する情報ネットワークの構築を推進することを目的とするもので、生物多様性センターは政府側受け入れ機関としてその研修課程の半分以上を実施しています。今年度の研修では、政府機関で自然保護政策に携わっている8カ国9名(アルゼンチン・チリ・クック諸島・メキシコ・ネパール・サウジアラビア・トーゴ各1名、ブラジル2名)の研修生が来日し、生物多様性情報の管理及び公開に関する専門的な知識及び技術を学習しました。



講義「環境パートナーシップオフィスの取り組み」

毎年この時期に実施しているこの研修の具体的な内容としては、日本の生物多様性情報の整備・運用状況について講義を受けるとともに、インターネットを通じて情報発信を行う技術についてウェブサイトのモデル作成などの実習を行うもので、今年度からは実際にシステムの開発・導入について企画提案を行うためのアクションプランの作成実習が加えられました。このため、今年は関係する各機関の協力を得て、例年に比べ講師側の人数を増やすなど、体制を強化して研修受け入れに臨みました。実際に参加した研修生にとっては、自然環境保全基礎調査やJ-IBISなど日本の生物多様性に関する現状を学習するだけでなく、ウェブサイトのモデルやアクションプランの作成を通じて自国の生物多様性情報の現状を分析して再確認する良い機会にもなりました。当センター以外では、霞ヶ関の環境本省でのわが国の自然保護行政や、専門の機関でのデータベース、GIS(地理情報システム)などの情報技術に関する講義・実習を受けました。また、

当センター周辺の富士北麓地域、北海道の知床や釧路湿原などを視察し、日本の多様な自然に触れながら地域の自然保護の取り組みと課題についても学習しています。

研修生は、昼食の時間になっても実習を続けたり、より高度な技術について質問をしたり、非常に学習熱心な様子がうかがえました。また、箸の使い方を学んだり、城郭や神社仏閣など歴史的建造物について調べたり、日本文化についても興味を持って日本での滞在を有意義に過ごせたようです。一方、生物多様性センターの職員にとっても、多様な国で自然保護活動に携わっている人々と交流する良い機会となりました。



知床財団野外講義



閉講式



第9回自然系調査研究機関連絡会議（NORNAC） 調査研究・事例発表会の開催

平成18年11月30日～12月1日、岩手県環境保健研究センターと生物多様性センターの共催により、岩手県盛岡市において第9回自然系調査研究機関連絡会議（以下、「NORNAC」）及び調査研究・事例発表会が開催されました。

1日目の調査研究・事例発表会では、地元の研究者による講演会に続いて15機関から16題の事例発表があり、全国各地からNORNAC構成機関のほか、都道府県の自然保護担当者や行政機関関係者、研究者、地元の市民等、約80名が参加し、調査研究に係る情報交換を行いました。2日目はNORNAC構成機関による連絡会議を開催しました。連絡会議には、構成団体のほか、オブザーバーとして都道府県自然環境行政担当者等あわせて約40名が出席し、今後のNORNACの活性化を図るための活発な意見交換が行われました。

NORNACの詳細及び会議開催内容については以下のURLからご覧いただけますので、ご参照下さい。

自然系調査研究機関連絡会議（NORNAC） URL : http://www.biodic.go.jp/relatedinst/rinst_main.html



生物多様性センター来館者の声

生物多様性センターでは、年間を通して館内にアンケート記入コーナーを設置しており、来館者の方に任意で回答していただく方式で利用者のご意見の集約に努めています。ここに昨年の通常開館時におけるアンケート結果を取りまとめましたので報告します。

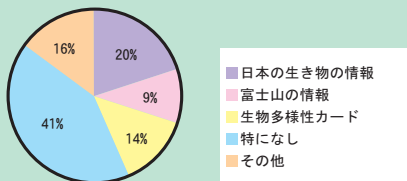
（集計対象アンケート：平成18年3月～12月分、ただしイベント分を除外）

来館の目的として、生物多様性カード（の取得）が1割強となっており、ゴールデンウィークや「多様性まつり」を通じて

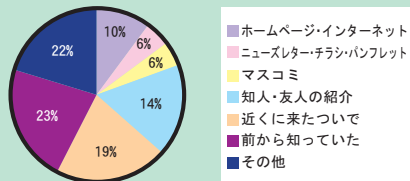
配布したカードの人気の高さがうかがえます。また、おもしろかった展示については、常設展示室に次いでミニ企画展示の人气が高く、特に7月～9月にかけて実施したコウモリ展示が好評でした。

今後も来館者の声を大切にして運営をしていきますので、ご来館の際はアンケート記入へのご協力よろしくお願い致します。

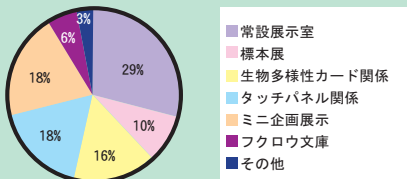
【図1】 来館の目的



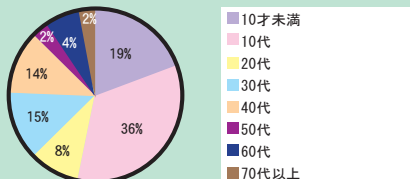
【図2】 知ったきっかけ



【図3】 おもしろかった展示



【図4】 年齢層



生物多様性センターに収蔵している標本の紹介（12回）

タンチョウ保護の現状と今後の課題

タンチョウの学名であるグルス・ヤポネンシスは、ラテン語で「日本のツル」という意味です。かつては北海道



和名：タンチョウ
RDBランク：(VU) 絶滅危惧・類
学名：*Grus japonensis*
英名：Japanese crane
分類：ツル目ツル科

まった冬の給餌などの保護活動によって徐々に個体数が増加し、1960年代前半には約180羽、80年代には約300羽に回復しました。そして、保護活動から約半世紀後の2006年1月にはついに1000羽を超えました。しかし、個体数が回復していく一方で新たな課題が生じています。生息地となる湿原の面積の減少により、生息地の過密化

が深刻になっています。さらに、絶滅前から個体数を回復してきたタンチョウは遺伝的多様性が低いと考えられており、重篤な感染症が発症した場合などに大きな影響を受けるおそれがあります。また、無秩



骨格標本

全土で普通に见られていましたが、狩猟による乱獲や生息地である湿原等の開拓によって、明治末期にはほとんど見られなくなり、一時は国内で絶滅したものと思われました。

その後、1920年代に釧路湿原で再発見され、1952年に特別天然記念物に指定されるとともに、この頃から始

序な餌やりによりタンチョウの人馴れが進んで人の生活圏を頻繁に利用するようになると、農作物等への被害が発生したり、電線や車両との接触事故に遭遇する可能性が大きくなることが懸念されます。このため、今後は数を増やすだけでなく、個体群を健全に保ちつつ、人間との軋轢を避けながら後世へ伝えていくための方向付けが必要であるとともに、人馴れを助長する個人的な餌やりの自粛や、観光客やカメラマンのモラルの向上を図ることも大切です。

その具体策として、タンチョウが自然状態で安定的に存続できる環境を整えるため、給餌のあり方の整理と生息地の分散の促進について、専門家による議論・検討が進められています。今後は給餌の時期や期間、自然採食場との往来状況、周辺環境、繁殖実態等を勘案し、給餌を必要最低限の期間とし、タンチョウが自然界で採餌できる状況にすることが大切です。特に十勝地方では、1971年に初めて繁殖が確認されてから徐々に河川などでも越冬するようになり、現在では約50つがい飛来するようになりました。また、サロベツ地域では平成14年からタンチョウが観察され、平成16年には道東以外での約100年ぶりの繁殖も確認され、定着することが期待されています。

今後も、人とタンチョウとの共存を目指して、繁殖の安全性等の営巣条件や社会的な影響等にも配慮したうえで、生息地の分散につながるよう適切な給餌を実施するなど、地域と一体となってタンチョウの保護に取り組んでいきたいと考えています。

(北海道地方環境事務所 野生生物課)



生物多様性センターガイド -第4回- 富士山ライブカメラ

生物多様性センターガイド第1回(18号)で紹介したように、生物多様性センターは富士北麓の標高約1000mのアカマツ林の中に立地しております。そのため、毎日朝通勤途中に富士山が必ず目に入ります。毎日、眺めている富士山のわずかな変化から、四季の移ろいを感じ取ることが出来ます。



2005年1月1日 AM9:00



2006年1月1日 AM9:00



2007年1月1日 AM9:00

この3つの写真は過去3年、毎年1月1日の午前9時に富士山を撮影したものです。2005年は屋根や木々の枝に夜のうちに降った雪がうっすら積もり、背景にすがすがしい青空が広がった富士山の写真。2006年は曇り空でほとんど積雪がみられない富士山の写真。2007年は暖冬といえどもしっかり積雪した富士山の写真。富士山はいろいろな姿を私たちに見せてくれます。

これらの写真はセンターの屋上に設置したライブカメラが自動撮影した写真です。わざわざ同じ時間にセンターの屋上に登り撮影を行ったわけではありません。このライブカメラは、日中1時間に1回ずつ自動的に富士山を撮影するように設定されており、撮影した画像をインターネット上で公開しています。

(URL <http://www.sizenken.biodic.go.jp/pc/move/html/index.html>)

実際に閲覧することが出来る画像は過去30日間についての全画像で、自由に日時を指定して富士山を見ることが出来ます。例えば日にちを指定して朝から夕方にかけて変化する富士山の様子を観察したり、時間を指定して一ヶ月の富士山の様子を観察したりすることが出来ます。富士山の1日の変化、1ヶ月の変化をみなさまの目で確かめてみてはいかがでしょうか。



また、このライブカメラは静止画撮影だけではなく動画も撮影することが出来ます。上下左右のカメラアングルの変更、ズーム倍率の変更、パノラマ機能など、カメラを自分で操作することが可能です。お気に入りのアングルを見つけて動画ならではの富士山の変化をリアルタイムで観察してみてもはいかがでしょうか。雲の流れから風を感じたり影の移動から時の流れを感じたりすることが出来るかもしれません。



この生物多様性センター屋上に設置しているライブカメラは環境省が提供するホームページ「インターネット自然研究所」の1コンテンツ「国立公園ライブ映像(動画)」を通して見る事が出来ます。このホームページには各地の国立公園の風景や野生生物の姿を静止画で見ることが出来るコンテンツ「国立公園・野生生物ライブ映像」や絶滅のおそれのある動植物を掲載しているコンテンツ「RDB図鑑」といったものがあり、インターネットを使って自然体験や環境学習をすることが出来ます。

みなさま一度ご覧下さい。

(<http://www.sizenken.biodic.go.jp/index.html>)

第38回ガンカモ科鳥類の 生息調査の視察

毎年1月に全国で一斉に実施される「ガンカモ科鳥類の生息調査」は、通称「ガンカモ調査」と呼ばれ、今では年初めの恒例行事の一つとなっています。本調査は、1970年1月に林野庁が全都道府県に協力を呼びかけて実施して以来、環境省(当時は環境庁)への移管を経て継続実施され、本年で38回目を迎えました。今回は地元山梨県のガンカモ調査を視察いたしました。

1月15日、当日早朝は冷え込みましたが、快晴で風も無く、絶好の調査日和となりました。富士五湖地域のガンカモ調査は3班に分かれて調査を行うため、河口湖調査班に同行いたしました。調査員の方々は、車でゆっくり湖畔を周回しながらガンカモ類を計数し、主要ポイントでは下車して一羽一羽計数していました。基本的には対象種を分担して計数していましたが、類似種の判別にあたっては、スコップ等を用いて複数の調査員により観察することで精度を確保していました。種としては、マガモ、キンクロハジロ、ヒドリガモ、ホシハジロ、カワアイサ等が多く観察されましたが、いずれの種についても例年より少ないとのことでした。

本調査の調査員は、鳥獣保護員を含む狩猟関係者、鳥類保護団体関係者、都道府県担当者を中心に構成されています。調査員が収集したデータは各都道府県担当者のもとで集計され、当センターに送付されます。それらを全国集計し、例年4月初めに記者発表しています。これらのデータは、鳥獣保護区の設定やラムサール条約登録湿地の選定、アジア水鳥センサスへの協力など、野生生物の保全管理行政において活用されています。



調査風景



キンクロハジロ(中央左)・ヒドリガモ(右奥)
マガモ(左手前)・シジュウカラガン(中央手前)
オオバン(その他)

案内図



センターの出来事 (平成18年11月下旬～平成19年2月)

平成18年

- 11/28 藻場調査検討会(東京)
- 11/29 自然環境保全基礎調査
植生図GISデータ作成業務入札
- 11/30～12/1 第9回自然系調査研究機関連絡会議
(NORNAC) (盛岡市)
- 12/3 第1回巨木を語ろう全国フォーラム(東京)
- 12/7 自然環境保全基礎調査 種の多様性調査
アライグマ生息情報収集 企画提案会
- 12/8～12/27 重要生態系監視地域モニタリング推進事業
シギチドリ類調査データ整備 企画募集
- 12/11 自然環境保全基礎調査
人工衛星データ活用検討調査 企画提案会
- 12/12 植生調査凡例検討部会(東京)
- 12/13～1/9 重要生態系監視地域モニタリング推進事業
生態系モニタリング事例調査 企画募集

平成19年

- 1/12～1/29 自然環境保全基礎調査
種の多様性調査手法等検討事務 企画募集
- 1/12～1/31 インターネット自然研究所システム保守業務
企画募集
- 1/12～2/1 情報収集管理等支援業務 企画募集
- 1/15 展示室シアタープロジェクターの交換業務入札
ガンカモ科鳥類一斉調査
- 1/21 モニタリングサイト1000
シギチドリ類冬期一斉調査日
- 1/24 エントランスキャノピー安全対策工事入札
- 1/29 インターネット接続業務入札
- 1/31 モニタリングサイト1000
里地検討会(東京)

発行：環境省自然環境局生物多様性センター

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾5597-1
電話：0555-72-6031 FAX：0555-72-6032
URL：<http://www.biodic.go.jp/>
e-mail：newsman@biodic.go.jp

※ニュースレターは下記URLからもご覧頂けます。

URL：<http://www.biodic.go.jp/center/news/>